

大會記録

合競上競技大會は既報
收穫であった

今日は東・あしたは西
聖州を牛ダ天走り
兩刀使ひ川崎三藏

收穫は一万米

全伯陸上終る

宮田・河野共に入賞

五輪大會豫選兼ね

川崎三藏! 隨分有名になつたものだ、新潟では山田と云い、南郷と名乗る者もいる。この苗字なら出まかせ何とも名乗るだらう

お

相

は

今

は

東

・

あ

し

た

は

西

・

聖

州

を

牛

・

ダ

・

天

・

走

・

り

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

NOTICIAS DO BRASIL

Diretor-Interino e Proprietario: SEISAKU KUROISHI

Fundado em 1917

Redação, Administração e Oficina: Rua Caramuru, 63 — Telefone, 2-2837 — Caixa Postal, 3730 — São Paulo

Assinaturas:
Anual Cr\$ 24,00
Semestral 12,00
Trimestral 6,00
Exemplar 2,00

N.º 2.714

ANO XXXI

SÃO PAULO, 5 DE MAIO DE 1948

Circula às Segundas, Quartas e Sextas

手紙の訴人 (1)
之は可笑いしぞ、案外な事もあるものぢや」と、同心は狐につまられた心地がした。

「全く怪有ですががね」と、佐兵衛も呆れて顔を見合はせた。矢張眞實お絹の使ひだつた。拔けるやうに婢娘は衆三體が來たといふので、てつり一件者と早合点したが、矢張眞實お絹が言ひに来る暇がないから、手紙を書いて、使ひに持たし寄越したに違ひなかつた。『奴は此方までお絹が言ひ下らぬ取越苦勞をしたつけな』

『だが旦那、お絹の隣りの家に、そんな綺麗な女で、衆三體に結つてゐなんざあ確かに居やあしませんざ』

佐兵衛が蜘蛛肩をひそめるのだと考へた。

『汝はお絹が戻返とも打つたやうに言ふけれど、此手がお絹を次郎長の味方として、不愉快と思つて居る處から、難癖を附けて見たがるのだと考へた。

『マア、夫や左様ですが』

佐兵衛は鏡の裏を拭ひ去つた程には、結麗障張と信じられなかつた。

『お絹のお陰で、盜まれた何より。若し浪人に入ると、今嘗は疾くに京都まで届いて了つて居るんだ』

浪人の手に渡らなかつた其結果を考へると、山本は身ぶるひが出る程恐ろしい。下手にいけば公儀の土台にひゞが入りかねないのだ。

『ちや旦那、どうしよまね』

『どうするものか、此手紙を語據に御奉行様に申上げ直に召捕れと言ひなきるに違ひないわい』

『ちや、旦那が御奉行様に行きなき間、俺はすつかり

上下的區別は御座りませ

手紙の訴人 (2)
前田囲山

(63)

手配して置きますぞ』

今こそ少翁を召捕つて、衆三體を引すり出すのだと佐兵衛は内々力嗟返つた。

奉行の不機嫌

御身が言はれる事も尤も付では、乃公も外心に思はないではない。然し僅に史の證文を以つて召捕するといふのは、粗鄙にも思はれるではないか』

町奉行藤山能登守は、膝元にお絹の密書を眺めながら、山本同心の傍に腰を下す。

『斯く明白なら證據歴然と御座いまする』

山本は案外の心地で、頬

む木蔭に雨漏る黒ひがした

『證據には相違ないが、言はゞお絹といふ女の片言ぢや。御身が其邊を取調べて居るんぢやないか』

『汝は京衣へ入らぬものとも御座りますが、左様な暇を缺き居りまする』

と、草深様には今晚にも當地を引上げられます。然る時は大切なる公儀御書付

は、お絹の爲に怨みを晴らさざるは思議なり妖婦を召捕能登は死友の都筑元之進を、傳馬町の旅籠において、草深様には今年にも當てて、余三體の女の爲に殺され居るんぢやないか』

『お絹の爲に、決して落つて居るんぢやないか』

『マア、夫や左様ですが』

佐兵衛は鏡の裏を拭ひ去つた程には、結麗障張と信じられなかつた。

『お絹の爲に、決して落つて居ることが知れたのだ』

『衆三體の阿魔も、矢張彼處に置つてあるんですぜ』

佐兵衛は男の鬚を切られた遺恨が骨髄に徹して居る。

『お絹が草深限りで、外の浪書が草深限りで、外の浪人の手に渡らなかつたの何より。若し浪人に入ると、今嘗は疾くに京都まで届いて了つて居るんだ』

『ちや旦那、どうしよまね』

『どうするものか、此手紙を語據に御奉行様に申上げ直に召捕れと言ひなきるに違ひないわい』

『ちや、旦那が御奉行様に行きなき間、俺はすつかり

上下的區別は御座りませ

手紙の訴人 (3)
前田囲山

(63)

手紙の訴人 (4)
前田囲山

之は可笑いしぞ、案外な事もあるものぢや」と、同心は狐につまられた心地がした。

『全く怪有ですががね』

と、佐兵衛も呆れて顔を見合はせた。矢張眞實お絹の使ひだつた。拔けるやうに婢娘は衆三體が來たといふので、てつり一件者と早合点したが、矢張眞實お絹が言ひに来る暇がないから、手紙を書いて、使ひに持たし寄越したに違ひなかつた。『奴は此方までお絹が言ひ下らぬ取越苦勞をしたつけな』

『だが旦那、お絹の隣りの家に、そんな綺麗な女で、衆三體に結つてゐなんざあ確かに居やあしませんざ』

佐兵衛が蜘蛛肩をひそめるのだと考へた。

『汝はお絹が戻返とも打つたやうに言ふけれど、此手がお絹を次郎長の味方として、不愉快と思つて居る處から、難癖を附けて見たがるのだと考へた。

『マア、夫や左様ですが』

佐兵衛は鏡の裏を拭ひ去つた程には、結麗障張と信じられなかつた。

『お絹の爲に、決して落つて居ることが知れたのだ』

『衆三體の阿魔も、矢張彼處に置つてあるんですぜ』

佐兵衛は男の鬚を切られた遺恨が骨髄に徹して居る。

『お絹が草深限りで、外の浪書が草深限りで、外の浪人の手に渡らなかつたの何より。若し浪人に入ると、今嘗は疾くに京都まで届いて了つて居るんだ』

『ちや旦那、どうしよまね』

『どうするものか、此手紙を語據に御奉行様に申上げ直に召捕れと言ひなきるに違ひないわい』

『ちや、旦那が御奉行様に行きなき間、俺はすつかり

上下的區別は御座りませ

手紙の訴人 (5)
前田囲山

(63)

手紙の訴人 (6)
前田囲山

之は可笑いしぞ、案外な事もあるものぢや」と、同心は狐につまられた心地がした。

『全く怪有ですががね』

と、佐兵衛も呆れて顔を見合はせた。矢張眞實お絹の使ひだつた。拔けるやうに婢娘は衆三體が來たといふので、てつり一件者と早合点したが、矢張眞實お絹が言ひに来る暇がないから、手紙を書いて、使ひに持たし寄越したに違ひなかつた。『奴は此方までお絹が言ひ下らぬ取越苦勞をしたつけな』

『だが旦那、お絹の隣りの家に、そんな綺麗な女で、衆三體に結つてゐなんざあ確かに居やあしませんざ』

佐兵衛が蜘蛛肩をひそめるのだと考へた。

『汝はお絹が戻返とも打つたやうに言ふけれど、此手がお絹を次郎長の味方として、不愉快と思つて居る處から、難癖を附けて見たがるのだと考へた。

『マア、夫や左様ですが』

佐兵衛は鏡の裏を拭ひ去つた程には、結麗障張と信じられなかつた。

『お絹の爲に、決して落つて居ることが知れたのだ』

『衆三體の阿魔も、矢張彼處に置つてあるんですぜ』

佐兵衛は男の鬚を切られた遺恨が骨髄に徹して居る。

『お絹が草深限りで、外の浪書が草深限りで、外の浪人の手に渡らなかつたの何より。若し浪人に入ると、今嘗は疾くに京都まで届いて了つて居るんだ』

『ちや旦那、どうしよまね』

『どうするものか、此手紙を語據に御奉行様に申上げ直に召捕れと言ひなきるに違ひないわい』

『ちや、旦那が御奉行様に行きなき間、俺はすつかり

上下的區別は御座りませ

手紙の訴人 (7)
前田囲山

(63)

手紙の訴人 (8)
前田囲山

之は可笑いしぞ、案外な事もあるものぢや」と、同心は狐につまられた心地がした。

『全く怪有ですががね』

と、佐兵衛も呆れて顔を見合はせた。矢張眞實お絹の使ひだつた。拔けるやうに婢娘は衆三體が來たといふので、てつり一件者と早合点したが、矢張眞實お絹が言ひに来る暇がないから、手紙を書いて、使ひに持たし寄越したに違ひなかつた。『奴は此方までお絹が言ひ下らぬ取越苦勞をしたつけな』

『だが旦那、お絹の隣りの家に、そんな綺麗な女で、衆三體に結つてゐなんざあ確かに居やあしませんざ』

佐兵衛が蜘蛛肩をひそめるのだと考へた。

『汝はお絹が戻返とも打つたやうに言ふけれど、此手がお絹を次郎長の味方として、不愉快と思つて居る處から、難癖を附けて見たがるのだと考へた。

『マア、夫や左様ですが』

佐兵衛は鏡の裏を拭ひ去つた程には、結麗障張と信じられなかつた。

『お絹の爲に、決して落つて居ることが知れたのだ』

『衆三體の阿魔も、矢張彼處に置つてあるんですぜ』

佐兵衛は男の鬚を切られた遺恨が骨髄に徹して居る。

『お絹が草深限りで、外の浪書が草深限りで、外の浪人の手に渡らなかつたの何より。若し浪人に入ると、今嘗は疾くに京都まで届いて了つて居るんだ』

『ちや旦那、どうしよまね』

『どうするものか、此手紙を語據に御奉行様に申上げ直に召捕れと言ひなきるに違ひないわい』

『ちや、旦那が御奉行様に行きなき間、俺はすつかり

上下的區別は御座りませ

手紙の訴人 (9)
前田囲山

(63)

手紙の訴人 (10)
前田囲山

之は可笑いしぞ、案外な事もあるものぢや」と、同心は狐につまられた心地がした。

『全く怪有ですががね』

と、佐兵衛も呆れて顔を見合はせた。矢張眞實お絹の使ひだつた。拔けるやうに婢娘は衆三體が來たといふので、てつり一件者と早合点したが、矢張眞實お絹が言ひに来る暇がないから、手紙を書いて、使ひに持たし寄越したに違ひなかつた。『奴は此方までお絹が言ひ下らぬ取越苦勞をしたつけな』

『だが旦那、お絹の隣りの家に、そんな綺麗な女で、衆三體に結つてゐなんざあ確かに居やあしませんざ』

佐兵衛が蜘蛛肩をひそめるのだと考へた。

『汝はお絹が戻返とも打つたやうに言ふけれど、此手がお絹を次郎長の味方として、不愉快と思つて居る處から、難癖を附けて見たがるのだと考へた。

『マア、夫や左様ですが』

佐兵衛は鏡の裏を拭ひ去つた程には、結麗障張と信じられなかつた。

『お絹の爲に、決して落つて居ることが知れたのだ』

『衆三體の阿魔も、矢張彼處に置つてあるんですぜ』

佐兵衛は男の鬚を切られた遺恨が骨髄に徹して居る。

『お絹が草深限りで、外の浪書が草深限りで、外の浪人の手に渡らなかつたの何より。若し浪人に入ると、今嘗は疾くに京都まで届いて了つて居るんだ』

『ちや旦那、どうしよまね』

『どうするものか、此手紙を語據に御奉行様に申上げ直に召捕れと言ひなきるに違ひないわい』

『ちや、旦那が御奉行様に行きなき間、俺はすつかり

上下的區別は御座りませ

手紙の訴人 (11)
前田囲山

(63)

手紙の訴人 (12)
前田囲山